

SHINGON HORONIC

# 色は匂へど

IRO

WA

NIO

E

DO



PHOTO SHU FUJIWARA

## 特集1 林屋晴三が語る 茶の湯の世界

平成十一年睦月一日発行 卷九

## 三つの力

真言密教では宇宙を三つの力が司る

宇宙にあまねく力 法界力

如来が衆生を救おうとする力 加持力

衆生が悟りをめざす力 功徳力

この三つの力が調和したとき

妙なる果が生まれます

雪のなかに一輪の羽衣が咲くのにも

この三つの力調和が見られます

新しい一年を三つの力で

豊かな日々にしましよう

三つの力が満ちて美しい花が咲く



## 日本の心と形

3



特集

林屋晴三が語る  
茶の湯の世界

11

現代の道しるべ

加持力を授かる二つの法

5

子供と楽しむ  
和紙づくり



連載

大師のまねび 竹内  
信夫

連載

真言密教への誘い

西宮  
紘

15

16



弘法大師 西新井大師藏



新刊紹介『雅藝草子』

川邊りえこ著

工作舎

17

# 日本のこころと形



新年を迎える

松は美しい緑とともに

山の大きな氣を

運んできます

歳も心もあらたまり

あらたな一年を

迎えます



# 林屋晴三が語る茶の湯の世界



平安の初期、嵯峨天皇により茶の栽培が始まられて以来、茶の文化は今なお隆盛だ。

弘法大師はその文章の中でしばしば茶湯により心をなごませたことを記している。

今なお隆盛を極める茶の湯の世界を林屋晴三先生に語つていただいた。

私の家にはいつも釜がかかり、毎週、お茶の先生もみえていて、また私も先生のところへ行くということで、お茶は熱心にいたしました。戦争中でしたが京都は幸い爆弾が落ちないのでね。

その後、東京へ来まして東京博物館へ入り、最初は中国陶磁に惹かれました。日本のは貧弱でした。仁清、乾山などはありましたがね。やがて松永安左右衛門さんの茶道具を中心とした物が寄贈になる。また松平家などの寄託品もあり、日本のものも充実してまいりました。

ですから私は文字情報からではなく徹底的にものに教わったと思っています。ものを見ていくと文献に書いてあることが「おやつ」と思うことや、時代順に陶磁器を並べていくと、どうしてもそこに納まらない物が出てきます。本物を心の中に収めておけば間違うことは無いですね。

真贋並べてみればね、わかりはいいのかもしれませんですね。やはり本物を見ないと。骨董屋さんでも修行するにはとにかく名品を見ろといいますね。



利休さんの道具もそうですね。南方録なんかは一級の資料といわれていますけど、茶会と利休の道具を重ね合わせてみるとどうしても「おやつ」と思うことが出て来ますね。

その点、物は真実を語りますね。

花は亭主の客への思いを表す



すでにそこにあつたかのように花を指す

「籠を前に迷つていてはいい花は入りません」

宗旦など三千家分立の時代になると、利休さんの道具を尊ぶ人がでてきて、利休道具を作らせる人も多くなり、利休道具を一つの基本形にしてしまいますね。

利休さんが美の絶対値を示したことによつてね。でも利休さんはそれを基本形で守らせる型にしようと思つたわけではないですね。

たとえば曜変天目茶碗。国宝でいまは静嘉堂文庫にありますけど、この天目茶碗を前にすると確かに美しい。しかしこの茶碗を茶室に持ち込んだときにはどうでしようか。

一方、長次郎の黒楽茶碗。この茶碗を茶室に持ち込むとそこからさまざま世界が拡がつてくる不思議な付加価値の高さがあります。

曜変天目茶碗はそれ一つで自己完結していますね。利休道具はそこから、最初に出会つたところが始まりで、その背景や背後にある物、人にまで世界が拡がりますね。

しかしその完成度の高さゆえ、今の茶の湯が閉ざされていると思います。利休以来の侘茶の態を、茶の湯の最終的な姿とみては茶の湯の精神にも利休さんの心にもかなわないと思います。利休さんが

室町の書院の茶風をことごとくあらためて、桃山の今を生きる茶風を打ち立てたように、現代の私たちも現代の風流する心を大いに培わないといけませんね。そこから生まれるもののが明日の伝統となるわけですから。

満願寺を設計された吉田五十八さんが伝統をしつかりふまえつづ現代の数寄を見事に作り上げたように、茶の世界にもそれが求められますね。

茶の湯は本来、遊興として出発しています。茶が遊びでなかつたらとうてい今まで伝わらなかつたでしょう。そして遊びの場として茶の湯は最高の場であったと思います。その遊びの場に利休も光悦も、遠州も茶に生き茶に遊んだ天才達です。

遊びの場として茶の湯ほど理にかないそして奥深い遊びは無いと思います。

生け花、床の間の掛け物、茶碗、水差し、亭主と客が時間と空間という間の中で一座を建立する総合芸術です。

それぞれの道具の取り合わせと見立ての心ですね。見立ては想像力ですね。豊かな想像力がなければ見立ては出来ません。その見立てが出来た上でさらに自分の形を求めていく。晩年の十年、六〇才になつてから利休さんの創造性は發揮されますね。長次郎に楽茶碗を造らせる。この楽茶碗は、利休さんの求道的なこころが結集していますね。無駄な物を全部取り払つて素直な造形になり、土の性そのものを楽しんでいる。

茶杓もそれまでは象牙でした。紹鷗が竹の茶杓を考案しましたが象牙の形そのままですね。利休さんは竹の節を茶杓の真ん中にもつてくる。竹の性を生かしながら造形としても美しい。



林屋晴三 東京博物館名譽館員

財団法人今日庵 茶道資料館 常任顧問

財団法人 草月会 顧問

財団法人 常任顧問

財団法人 草月会 顧問



じつに自然なさりげない先生の手前  
「一つ一つの動きに思いを込めないと手前にはなりません。」

利休さんの二重切の竹花入れもそうですね。  
一方で光悦という人は同じ侘び数寄でも、もっと自由で遊び  
ごころが有りますね。茶碗の造形に心の自由を保つて遊びきつ  
て、一つの究極を示したのが光悦ですね。ですから光悦の茶碗  
を真似しようと思つてもできっこない。後世、光悦写しという  
ものがありますがほんとにひどいですね。

お茶にはもちろん基本的なルールは必要で、それを超えて、  
その人の人格が出るような茶になると良いですね。それには男  
性がもつとお茶を楽しんでくれると良いですね。  
私たちの先祖が一つの見事な、そして自由な遊びの文化を生  
活の中に残していくてくれたのですから。



楽しい語らいの場



利休が長次郎に焼かせた黒楽茶碗

取材協力 日本雅藝俱楽部 日本の文化の創意ある発見をテーマに書を中心に  
茶、陶芸、笛、香道などを真に一流の先生のもとで楽しめる。  
お問い合わせ 電話 03-3798-1373

PHOTO SHU FUJIWARA

## 加持力を授かる二つの法

かじりき



お不動さまは、今から約千二百年前に弘法大師空海さまによって日本に勧請されました。その登場は劇的です。お大師さまの歴史への登場も劇的でした。遣唐使の一員として突然その歴史の表舞台に立たれました。お不動さまの登場は、お大師さまが唐の都から日本に帰る船上でした。帰国の船は嵐に荒れ狂う波濤の中で木の葉のように舞い、船上の人々は死を覚悟しました。お大師さまは一心に不動明王の真言を唱え、密教を日本に伝えることと航海の安全をいのりました。

荒れ狂う波濤に右手に利劍を持つお不動さまが現れ、その利剣で波を切ると瞬く間に嵐は治まり、波も静まりました。お大師さまや、遣唐使の人々も無事日本に帰ることが出来ました。

この後、お不動さまは絶大な靈験ある明王として広く信仰を集めようになります。明王はお不動さまをはじめ降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王など多くの明王がいらっしゃいます。それぞれ如來の教令輪身というお姿で、濟度しがたい衆生を強い力で救済されます。

大日如来	.....	不動明王
阿閦如来	.....	降三世明王
寶生如來	.....	軍荼利明王
阿彌陀如來	.....	大威徳明王
不空成就如來	.....	金剛夜叉明王

それぞれの如来様には必ず明王のお姿があります。なかでもお不動さまは宇宙を本体とする大日如来様の教令輪身ですのでそのお力は絶大です。そのお力は加持力ともいわれる大宇宙に普く力です。

護摩壇はお不動さまのご身体です。

護摩炉はお不動さまのお口です。

この大きなお力を授かるために二つの法があります。一つはお不動様のご真言をお唱えすることです。

お不動さまは明王です。明は闇を破る力です。本尊様の大きな力で光が普く広がります。これが明です。明にはもう一つ大切な意味があります。

明とはご真言のことです。お不動さまをお祈りするとき私たちには慈<sup>じ</sup>救<sup>け</sup>の呪<sup>じゆ</sup>というご真言をお唱えします。繰り返しお唱えすることで、私たちの心身の波動がやがてお不動さまのもつ大宇宙のおおきな波動と一つになります。そのとき心の闇は払われます。

お不動さまの大きな加持力を頂くもう一つの法はお護摩の修法です。お導師さまが護摩壇に上がられると、心をお不動さまと同じ境地にし、手にはお不動さまの印を結び、口にはお不動さまのご真言をお唱えします。心と言葉とお体の三つの働きをお不動さまと全く一つにしますが、この三つの働きを三密といいます。お導師さまは今やお不動さまそのものになり、お不動さまの秘める大慈悲心の中で護摩法の完成を目指します。

そして結界が四方と金輪<sup>こんりん</sup>界<sup>かい</sup>という地下深くまでむすばれ、さらに天<sup>あ</sup>上<sup>う</sup>には網がかけられ悪鬼邪鬼がこの結界の中に入れないようになります。お護摩に出会う信者の方々をも悪鬼から守ります。そ

して清浄になつた道場に日本中の神仏をお招きし、尊い護摩法の完成を祈ります。そして最初に火天を勧請し、次ぎにお不動さまを勧請します。

そして護摩炉から燃え盛る炎は、お不動さまのお心です。ここにもお不動さまの三密が働いています。燃え盛る炎は、お不動さまの大慈悲と仏智が働いています。この炎の働きによつて人々の願いを満たし人々の心に安心を与えます。

しかしお護摩の法は人々の世俗的な願いを満たすだけではありません。人々の願いを、もっと大きな心の完成へと導きます。燃え盛る炎によつて人々の煩惱を焼き尽くし、生きとし生ける全ての無明を除き、より高い世界へと導くものです。お護摩の炎が静かに消えるときお護摩の法は完成しますが、お護摩の炎はお護摩に出会う全ての人々の心深くその炎が点ぜられ、お不動さまのもつ大きな誓願が静かに広がっています。



子供と楽しむ和紙づくり



牛乳パックを水につけておきます  
数日で紙が柔らかくなります  
パックの表面のフィルムをはがし  
ミキサーで細かくします

薄いお皿に水を張り  
そこに細かくなつた

牛乳パックの紙を流し込みます

一緒に絵の具を混ぜたり  
花びらを入れてもきれいです

ハンガーとストッキングで  
つくったこし器で

すくい乾かせば

美しい和紙ができあがります

最後にアイロンをあてると  
きれいに仕上がります

「大師のまねび」という表題について、「まねび」というのは今の若い人には判らない、少し説明を、という御指摘を読者の方から頂いた。「まねび」という言葉は、確かに、現代の日常生活では使われない。しかし、れっきとした日本語である。

『源氏物語』などには「まねぶ」という動詞がさかんに使われている（漢字を宛てて「学ぶ」とも書く）。「まねび」はそこから派生した名詞で、文字通り「まねる」と、あるいは「学ぶこと」である。

『キリストのまねび』という本がある。トマス・ア・ケンピスという人が、イエスの生き方を自らの体験のうちに内面化しつつ、キリスト教徒のために宗教生活の指南書として書いた本である。トマスは十五世紀西欧の人だが、この本は各國語に訳されて広く読まれている。

「大師のまねび」と書いたとき、私の頭の片隅にはそのことがあつた。私たち日本人の自覺的な宗教生

活にとって、キリスト教世界におけるイエスと同じ位置を占めているのは、わが大師空海である。大師を見習い、習うことで人としての生き方を学ばなければならぬ、という思いを私はそこに込め、いう御指摘を読者の方から頂いた。

「まねび」を志す者は、是非ともこの生き方を学ばなければならぬ、とい、という思いを私はそこに込めたつもりであつた。

見習うためには、大師という方がどのような人であったのかを知らなければならない。大師の目標されたものは何であったのか、その目指すものに向つて大師はどのように生きられたかを知らなければならぬ。大師を知るために向つて語っているかのような印象さえ、時に感じることがある。こんなことが、大師の書き残された文章を読むことである。

しかし、大師の書かれた文章を読むことは、現代の私たちにはたしかに内面化しつつ、キリスト教徒のために宗教生活の指南書として書いた本である。トマスは十五世紀西欧の人だが、この本は各國語に訳され、大師の書も私は好きだ。文章もして道遠し」の思いに苦しむ。

それでも少しづつだが、大師の文章が私のなかで息づいてくるのを感じる。大師が直接に私に向つて語っているかのような印象さえ、「親しみ」のなかにこそ私の「大師のまねび」がある。

生来本を読むことが好きで文学研究者を志したということもあり、私の好みは大師の文学的著作に向う。その点では、大師の弟子に向う。その点では、大師の弟子と言つた。それはしかし、文章のなかでも、眞済という方と私の波長はよく合う。『性靈集』を真波長さんが編纂し、後世に残してくれたのは、私のような人間を大師の世界上に導くためであつたかもし

語で書かれている。

そうなると、いやしくも「大師のまねび」を志す者は、是非ともつけている——「願わくはわが党の好事、永く師の迹を味わんことを」。この一文を読む度に、私は深い感謝を眞済さんに感じる。

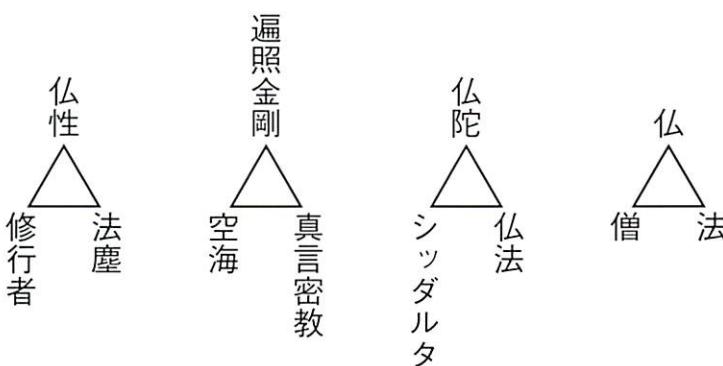
注 弘法大師の詩文

そうだが、書も、大師の精神と身体の動きを私たちに直接に示してくれる。そのことからも判るように、大師は表現者としての芸術家の大天分を豊かにもつっていた。大師の宗教的理念は、なるほど、『即身成仏義』をはじめとする精緻な理論的著作を通じて知ることができ。しかし、抽象的な理論以上に、大師は、感覚的に密教を感じることを重視された。大師の芸術はそこに位置付けられている。「まねび」の方法として、私は大師の文章との「親しみ」が大事だと言つた。それはしかし、文章の意味の観念的な理解ではない。そ�ではなく、大師の文章が持つ律動に心身を委ね、そこから深秘の意味を感じ取ることである。

トリコトミーの性格を「仏・法・僧」の三宝について考えてみよう。普通、我々衆生の目から見ると、三宝のうち「僧」あるいはまがりなりにも「法」が見えるだけである。その場合、「僧」は「法」をまつて「僧」たり得るのであり、「法」は「僧」をまつてはじめて現前する。つまり、「僧」すなわち「法」、「法」すなわち「僧」であると言えるわけである。しかし、お釈迦様の場合はどうであつたろうか。当時の人たちにとつては、お釈迦様は「僧」でもあり「法」でもあります。しかも「仏陀」ではなかつたのか。

つまり、「ゴータマ・シッダルタ」すなわち「仏法」、「仏法」すなわち「ゴータマ・シッダルタ」、「ゴータマ・シッダルタ」すなわち「仏陀」、「仏陀」すなわち「ゴータマ・シッダルタ」すなわち「仏陀」、「仏陀」すなわち「仏法」である。同様のことはお大師様にも言えて、お大師様は「空海」であり、「真言密教」でありしかも「遍照

金剛」であると言える。これをトリコトミーで表すと、図のようにリコトミーで表すと、図のようになる。



しかし、お釈迦様もお大師様も修行者であつた時には、さまざまに接せられて、最な教説（法塵）に接せられて、最左図のようなトリコトミーを構成されていたはずである。このトリコトミーの重要なことは、修行者と法塵との関係である。つまり、その関係は縁によるということがある。修行者がどのような法に出会うか、あるいは一つの法がどのように修行者と出会うかは縁による、すなわち偶然による、出会い以外のなものでもないということがである。修行者は法をまつて、法は修行者をまつという縁起の関係によると言うより他はない。だからトリコトミーの三角形の底辺は世俗の世界に属し、トリコトミーの上の頂点は仏の世界（勝義諦）に属すると言うことができる。この意味で、例えば、三宝のトリコトミーでは、仏は勝義諦に属し、僧でもなければ法でもない、しかも僧であり法であるのが仏であり、したがつて我々衆生からみれば、如來（かくの）如く來（たる者）という性格をもつてているのである。

勝義諦の「諦」は境界を意味しているが、お大師様はこの世界を最高の真理の世界という意味で「第一義諦」とも称せられている。要するに、右に上げたトリコトミーは、本質的に勝義諦と世俗締から成り立つており、しかもそれは二分された別々の世界ではないという意味で、トリコトミーは同一平面上の三角形によって表現されているのである。このことと、真言密教における中心的な如来である大日如来が菩薩形をなされていることとは無関係ではない。如来は我々衆生を救済なさるうと世俗の人の姿をとつて活動なさっていることを示しておられるからである。どのようなお姿として出会うことができるか。それはまさに縁であると言うより他はない。いずれにせよ、こうした性格を備えたトリコトミーを用いて、お大師様の説かれた教えの一端を理解するために進んでいってみようというのが私の考え方である。

## 新刊紹介

みやびこと  
草子

川邊りえこ著

工作舎

今ようやくわが国の文化や芸術の高さを再発見しようと試みる人たちが現れ始めた。

ひとときの『ジャバネスク』

(日本を知らない外国人が日本の表現をしたようなインテリアや建築や着物など)ではなく自然と豊かに融合する感性豊かな日本人の美意識を求めて。

著者は日本の文化の創意ある再発見をテーマに日本雅藝俱楽部を創設し、懐古趣味に陥ったり、流派に拘泥することなく、日本の美の姿を探求している。

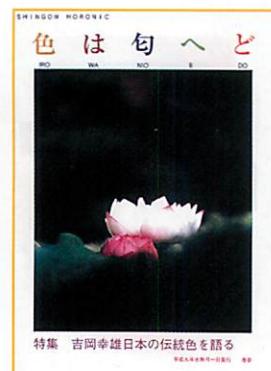
間・僕さ・幽玄・いびつ・数寄そして墨などの言葉から綴られた美しき三十三章。



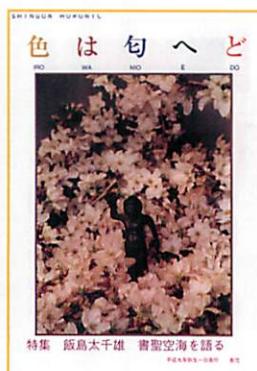
### 「色は匂へど」の既刊紹介



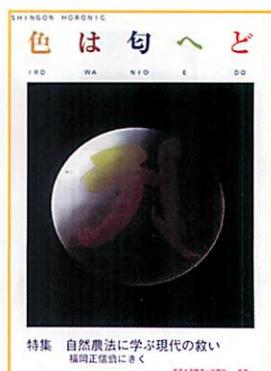
第4号



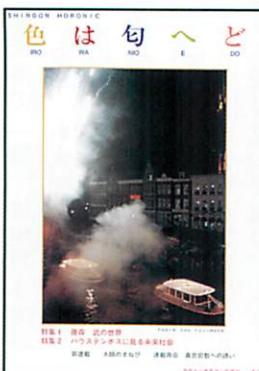
第3号



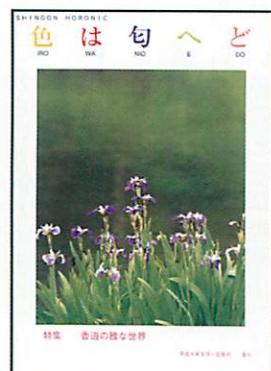
第2号



創刊号



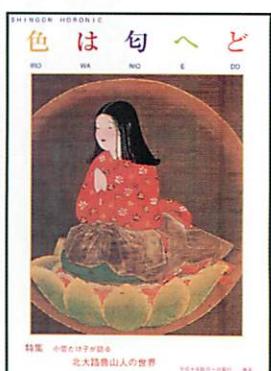
第8号



第7号



第6号



第5号

\*お陰様で心の情報誌「色は匂へど」も創刊以来三年目の新年を迎えます。現代が思想的にも経済的にもいきづまりを見せる中で、真に普遍的な価値ある情報を少しでもわかりやすい形で、お届けすることをテーマにして来ました。

\*とくに前号の『五木寛之さんへの答えとして』は大きなご支持をいただきました。またこうした記事は署名を入れて出した方が良いというご意見もいただきました。さらにこの心の情報誌「色は匂へど」の編集方法や作り方への問い合わせもありましたので、合わせてお答えします。

\*この小冊子は署名の入った記事以外は編集主幹が殆ど書いています。『特集』『現代の道しるべ』やあとがきなど。そのためあえて署名は入れていません。署名の無いコラムは主幹が書いていると思つて下さい。

またレイアウト、デザインも主幹がアップルのマックintoshというパソコンでしています。ソフトは『フォトショップ』と『ペジメイカー』です。写真家の撮影した写真をスキャナーで取り込み、レイアウトしていきます。と

ても簡単な作業で作業そのものは楽しく時間もかかりません。誰にでもこうした本の製作が可能になった時代です。ただインターネットのホームページは友人の専門家にまかせてあります。(基本的にコンピューターが好きではないので)出来上がったデータをフロッピーでそのまま印刷所に届けますので経費も安く出来ます。紙はサトウキビの砂糖を抽出した残りかすですから森林資源を傷めることも有りません。環境問題も深刻ですが商業ベースでシステム化すれば必ず解決できるでしょう。

でも簡単な作業で作業そのものは楽しく時間もかかりません。誰にでもこうした本の製作が可能になった時代です。ただインターネットのホームページは友人の専門家にまかせてあります。(基本的にコンピューターが好きではないので)出来上がったデータをフロッピーでそのまま印刷所に届けますので経費も安く出来ます。紙はサトウキビの砂糖を抽出した残りかすですから森林資源を傷めることも有りません。環境問題も深刻ですが商業ベースでシステム化すれば必ず解決できるでしょう。

\*戦後GHOの巧みな言論統制で日本の素晴らしい文化も家族制度も封印されてしましました。子供も大人も浮き草のようによりどころのない頼りない浮遊感の中でのワフワフとその日を過ごしています。人は「生きていることの実在感」をもとめて野卑な遊びに走り、またある人は生きることに意味を見いだせずに悩みを深めます。

\*さて日本のシステムがいよいよ末期現象をていしています。前にも書きましたが織田信長は楽市楽座により城下を繁栄させ、人と情報とお金を自然に集めました。今の日本のシステムはこれに逆行しています。

\*昨秋、五島美術館での展覧会『田鈍翁の眼』は絶品でした。

\*明治になり廃仏毀釈の嵐の中で日本本の仏教美術が海外へ流出したとき、三井財閥の益田孝翁は仏教美術を中心に日本人に日本文化の高さを再発見させましたが、戦後益田孝翁がいかなかつたことが残念です。

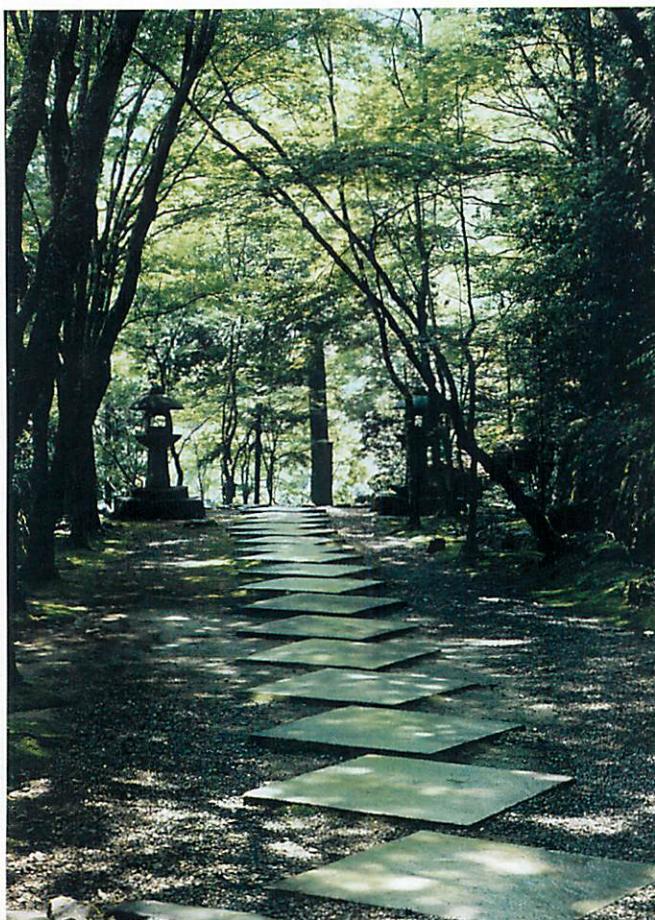
\*さて日本のシステムがいよいよ末期現象をていしています。前にも書きましたが織田信長は楽市楽座により城下を繁栄させ、人と情報とお金を集めました。今の日本のシステムはこれに逆行しています。

\*創造性を發揮することで子供達の心が豊かに変容することは口ボット博士森先生が始めた口ボットコンテストが実証しています。(「色は匂へど」四号特集参照)

創造性を發揮することで心が豊かに変容することは大人も同じです。

\*芸術による心の高い次元への変容は弘法大師が1200年前に説かれています。

\*宗教を教育現場で語れない日本ですが茶の湯や能などは義務教育に入れることは可能だと思います。



梅尾  
高山寺  
参道

写真 水野克比古

この本はツリーフリーペーパーで作られています  
さとうきびから砂糖を取り出したあの 残った繊維から作られています

次回発行は3月1日予定

特集 梅尾の明恵上人

Editor RYUJU ABE Art Director and Photographer SHU FUJIWARA Special Contributors RYUICHI ABE KO FUJIWARA  
Editorial Staff MIWA SAMURO KOJI TOKUMARU REIKO ONUKI KAZUFUMI MOTOYAMA  
HOMEPAGE DESIGN MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA Printing KORINKAKU  
PUBLISHER RYUBUN ABE EDITOR RYUJU ABE EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIN S.H.C

〒158-0082 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 ファクシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一巻第九号 平成十一年睦月一日発行